『吾輩は猫である』鼻物語

Junko Higasa

漱石は、ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』(The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman／紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見)に触発されて、そのモティーフである「鼻」から、小説を書き始めた。

「鼻」はまず日本の世情から始まる。吾輩が最初に見たのは、官僚になるために人脈を利用する「書生」という人間中で一番獰悪な種族で、表面は薬缶のようにつるつるしているが、中に打算を秘めている鼻である。次に金田夫人の「権力」という鼻が苦沙弥邸に乗り込んできて平民を圧迫する。そのあと金田君の「金力」という鼻が、鈴木藤十郎君という男らしさの衰退した平凡な鼻を操って世間を自在に動かそうとする。これは東大を出ても官僚になれるのは一握り／戦争によって利益を得るチャンスをつかんだ平民が先の考えもなく目前の私利私欲に走る／未来を創るべく教育された知識人の殆どが生活のために金満家に従う／国を思い自己を犠牲にして戦線に向かう男たちとは裏腹に、個人として楽な暮らしを夢見る男たちは弱体化し、その不甲斐なさを乗り越えて女が強くなるという世間の縮図である。

そして金田君の容貌は『トリストラム・シャンディ』主人公誕生時の写しである。書物によって古代ギリシャ・ローマに精通した父が「理想的な男として息子を完璧な鼻の持ち主にするために頼んだ著名な産科医が分娩時にヘマをしてつぶした」のはトリストラムの鼻であるが、同じく書物によって古代ギリシャ・ローマに精通した漱石が、その歴史を織り交ぜながら敢て潰して見せたのが金田君の鼻である。ここには富国強兵理論教育によって国家貢献する完璧な男を作るという理想を金という産科医がヘマをして潰し、日本の風習という顔面と何らの相談もなく出来上がった西洋化文明の鼻を持つ女が男に対抗するという国家の縮図が示されている。

ところで数字の符合は意識的か否か。スターンが第三巻で示した「鼻という語の示すところは、鼻そのものであって、それ以上でもそれ以下でもない」という定義を苦沙弥の発言に織り込んで世間の疑念をかわし、漱石が第四章に写したのは、『トリストラム・シャンディ』第四巻「スラウケンベルギウスの物語」である。それは「シュトラスブルク(現：ストラスブール)の町に現れた旅の男の巨大な鼻を見た人々は全能力を圧倒的に支配され、誰も彼らを止めることができず、誰もがその鼻を見ることを夢見た」という内容である。シュトラスブルクはローマ帝国から後に神聖ローマ帝国へ属し、ドイツとフランスが統治権を争い、ルネサンス期の宗教改革でカトリック教会とプロテスタント教会が並んだ町である。

この種明かしによって、苦沙弥が何故シャーレマン(西ローマ皇帝シャルルマーニュ＝カール大帝）とエルリントン(ワーテルローでナポレオン軍を破った鷲鼻アーサー・ウェルズリー初代ウェリントン公爵)の名を挙げ、『クレオパトラの鼻が少し短かかったならば世界の表面に大変化を来したろうと』いうパスカル『パンセ』の一文を引いて「無造作に鼻を馬鹿にしてはいかん」と発言したかがわかる。スターンの著述への称賛もさることながら、人々の心を一瞬に捉えて動かすものはどんな微細なものであろうとも侮ることはできない。対してギリシャ最後の希望オタンチン・パレオロガス(コ

ンスタンティノス・パレオロゴス東ローマ帝国皇帝＝ローマ帝国最後の皇帝）の東方正教会とローマカトリック教会の統合宣言が大反発をくらったように、深く根付いた人々の思想も簡単に変えることはできない。そこには人々を夢中にさせる西洋化と日本古来の精神が写し出されている。

さてこれらを表現するにあたって漱石が当然のごとく用いたのは、セルバンテス『ドン・キホーテ』から影響を受けたスターンが『トリストラム・シャンディ』に用いた「既成の文学ジャンルを取り入れたパロディ化」と「物語の人物が読まれていることを意識する」手法である。パロディはもちろん作中いたるところに見て取れる。またパロディは迷亭の法螺の如くふざけているように見えて、実は真実を隠している。そしてこの場合、読者を意識する者といえば、人間ではなく第三章から猫世界を離れて人間社会に接近した猫の吾輩である。吾輩は常に読者に見られていることを意識し、第四章「―何探偵？―」第五章「何故湧いた？」という形で、起こりうる読者の疑問に説明を加えている。そういう猫の問いかけに読者が反応するとき、猫と読者の間に他者と自己の「秘密の共有」という無意識の旨味が広がる。これは文学手法上、人々を夢中にさせる「鼻」と言えるだろう。結果、この手法を実践している漱石は、自然主義文学に疑問を抱かざるを得なくなる。

第一章でアンドレア・デルサルトのマニエリズムに重ねられた「写生」を試した漱石は、第四章でラファエル前派の「自然をありのままに写す」手法を実践した上で、自然主義定義者エミール・フランソワ・ゾラ、自然主義文学を攻撃した批評家ブルヌチエル(フェルディナン・ブリュンティエール)、それを援護したロマン主義文学者で批評家のシャルル・オーギュスタン・サント=ブ―ヴの名を挙げた。

そこへ第五章冒頭である。『二十四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく読むには少なくとも二十四時間かかるだろう、いくら写生文を鼓吹する吾輩でもこれは到底猫の企て及ぶべからざる芸当と自白せざるを得ない』とある。これは猫も眠らなければならないから二十四時間刻々と変化する自然をありのままに写すことは不可能という自然主義文学への反対意見であるが、ここにも『トリストラム・シャンディ』が写されている。スターンが描くトリストラムは、第四章半ばでまだ誕生一日目なのである。そこには一日の出来事を詳しく説明しようとすると二十四時間以上が必要であり、書けば書くほど読む量が増えるという嘘のような真実が述べられている。すなわちどんな筆の速さをもってしても、二十四時間の出来事を二十四時間以内に書くことは不可能なのである。さらに『製作の上に変化をあらわすのが困難であるならば、その上に徹頭徹尾の模倣(もこう)を示すのも同様に困難である』すなわち「全く違うものを二つ描け」と「全く同じものを二つ描け」は同義であるというパラドックスも示した。これによって漱石は人間が創造していない「自然」に棒杭を立てて空間を所有しようとする自然主義に反対して、文学のジャンルを空間論的全体的視野で捉えようとした。

そして『吾輩は猫である』は見事『トリストラム・シャンディ』同様の諧謔を著しえたが、ひとつだけ状況の違いがある。それは「神」の存在である。一句目は自力にて二句目からはひたすら神に念じて筆の流れに任せる「筆われを使う」スターンと、引き受けてくれる神を持たない、すなわち信仰に入れないために「われ筆を使う」漱石。神力と人力の問題は漱石作品の全編を貫くほど根強い。いずれにしても自ら著した『文学論』通り実践して見せた漱石は、やはり英文学者なのである。(2016.1.11.0:00)